

2-01 自閉症スペクトラム児の不登校に対する MTDLP を用いた介入と変化について

○田中 裕二(OT)¹⁾²⁾

1) 社会福祉法人関西中央福祉会 平成リハビリテーション専門学校

2) 国立大学法人 奈良教育大学 特別支援教育研究センター

Key word : MTDLP, 自閉スペクトラム症, 不登校

【報告の目的】 不登校となった自閉症スペクトラムの事例に対して、事例と家族に対して約8ヶ月間の段階的な支援を行い、他職種連携を図ったことで週に1～2回小学校に行くことが可能となった MTDLP 実践をここに報告する。

【事例紹介】 小学校3年で通常学級に在籍している女児で、机上課題の苦手さ離席行動が伴う授業態度の影響から教師からは叱咤的に指導されてしまい、学校へ行くことへの不安が強くなり X-1年から小学校に行くことができなくなる。学校の勧めもあり A 病院へ受診し X 年 Y 月に自閉症スペクトラム症と診断される。その後、学校と知人の勧めもあり Y+5ヶ月後に当センターで作業療法が開始となる。尚、発表に際して本人と家族の同意を得ている。

【インタビュー、評価】 インタビューでは「勉強がもう少しでもわかるようになれば、もう一度学校へ行きたい」との発言があった。WISC-IV (FSIQ : 93, VCI : 103, PRI : 104, WMI : 94, PSI : 73) と TMT (A : 82秒, TMT-B : 103秒)の結果からは処理速度の低下、注意機能の低下が示唆された。活動場面では特に国語と算数の机上学習が苦手であり離席行動などに繋がっていた。身体機能には問題はなく、WeeFIM は124/126で社会的交流以外は自立していた。以上のことから事例と母親に対して「もう一度学校へ行けるようになる」という生活行為を実現するために、机上学習を阻害している問題点への支援と、学校に対しては事例の関わりを含めた理解度を高めていただく、働きかけが必要であることを説明した。事例からは「難しくないやり方を教えてくれるなら」との返答があり、事例が決めた合意目標は「約6ヶ月後には学校に週に1回以上行くことができ、1回の授業で離席行動なく机上学習が30分以上行える」となった。これに関しての生活行為聞き取りシートでの実行度・満足度は共に1であった。

【作業療法実施計画】 1回60分の個別介入のプログラムとし、月に2回程度の頻度で実施した。基本プログラムは学習絵カードを使用し遊びの要素を取り入れて行い、処理機能、注意機能へアプローチを実施した。応用プログラムは学力と同等程度の漢字プリント、算数プリントを使用し、遊びの要素を取り入れながら実施し、机上学習が汎化できるように実施した。また、学校の教師にも参加してもらい事例との関係性向上を目的に実施した。社会適応プログラムは学校の教師に対して、調整が可能な範囲で月に1回程度 OT 場面に参加してもらうように依頼を行った。また、小学校へ訪問し母親と2名の教師と OT の4名で担当者会議を1度開催した。[合意目標達成期間] 事例、母親と学校との関係性や事例の生活課題を考慮し、通学が再開できる期間を検討した結果、6ヶ月～12ヶ月とした。

【結果】 合意した生活目標の「約6ヶ月後には学校に週に1回以上行くことができ、1回の授業で離席行動なく机上学習が30分以上行える」の、事例の実行度、満足度は共に7であった。減点の理由としては、毎日の通学には至っていないことが減点の要因であった。

【考察】 MTDLP の実践により、学校や机上学習に対してネガティブな感情を抱いている事例の生活課題が見える化でき、事例と母親に対しての明瞭な理解に繋げる事が出来た。また、活動と参加に焦点を当てた基本、応用プログラムが学校の授業内容を疑似的に再現し遂行したこと。初期導入時では遊びの要素を加えてポジティブな学習として強化を図ったことが今回の結果に影響していると考えられる。そして、事例が合意した生活目標を達成するための社会適応プログラムは作業療法士だけでなく、学校との密な連携を図ったことが、大きな要因であると考えた。